朝夷巡島記第八編 五

113
939
140

1 13
文 939
巻 241

朝夷巡島記全傳第八編巻之五

東都　松亭金水編次

續輯第十九　身を捐て節を全んし佳人の情　残毒忽地報ふ家族が最期

秋も九月下浣夕の風の身ゐを染む。川きゐ生ー芦茅ハ枯も竭さぐらさぐだ。
茱萸ー尾花霜ことも。まごき雪うと迫ぐる。琶媛ハ猩児の翠麻呂とゐ抱さるの
渕へ身を没ん。と岸ゐ立ちよりて処此処と。呻吟ー傍とうんとこ石ゐて刻める
地蔵ぐ。弐年経ぐる苔生て。基坐後光も剛損じぐる。何者ぐ著せるゐ巳
け。昔の小笠も今ハ朽ち。両ゐ腐ちん破羅ぐゐ。骨のこ遺ぐハ木枯ゐ。吹
荒さぐー蜘蛛の巣ぐ。冬の山田ゐ獨ぐる。破ぐー窠山子ゐ彷彿ぐる。媛ハ作ぐて
額著ぐ。六道能化と笑えぐる。地蔵并の尊さも。川きの凡ゐ吹曝さぐ。雨の

降る日も雪の夜も。身軀彰りてちのみ。衆生済度のなさうや。この世は夢の仮の宿。今宵ふ迫る狩と子ゞ。後の世助けるゝ。傳へ聞く稚きりのは罪業浅き故とりん。親と倶ゐえもいうず。賽の河原ふ集まりん。弁の教化と受さとぞ。こまゞ誠のこゝゝ。稚きりの後世とこそ。偏ふ憑こまゝゝ。と操かくこゝ愚痴の自ゞふ初夜も近づきさり。倘董次郎ゞ往方と探ゝ。こゝて會べ死後も志さ得遂ぬのこゝ。息ある中の恥辱ゝ慈愛悔ゝも世ふ在る程の心ゝりゝ今更ふ何とゝいたん一刻も。汚湛べまと思ひゝ。と弱る心と自ゝ励まゝ。岸ふ生る捫蔭小暗き方ふこゝりん。南無阿弥陀佛。弥陀仏。唱へあゞ身と離ら。尚巻水へ逆ゝまふ。乗入らんとまる裾曳捉へまゞ。侯の媛君と声ゞ。ちゝ是ぞこま。宮小四郎ゞ追手ゝ。心周章て振ゞ。と再び入らんと踏出し片足。その間ふ緊と抱き。媛ハ在ふもなゝれぬ思ひ。

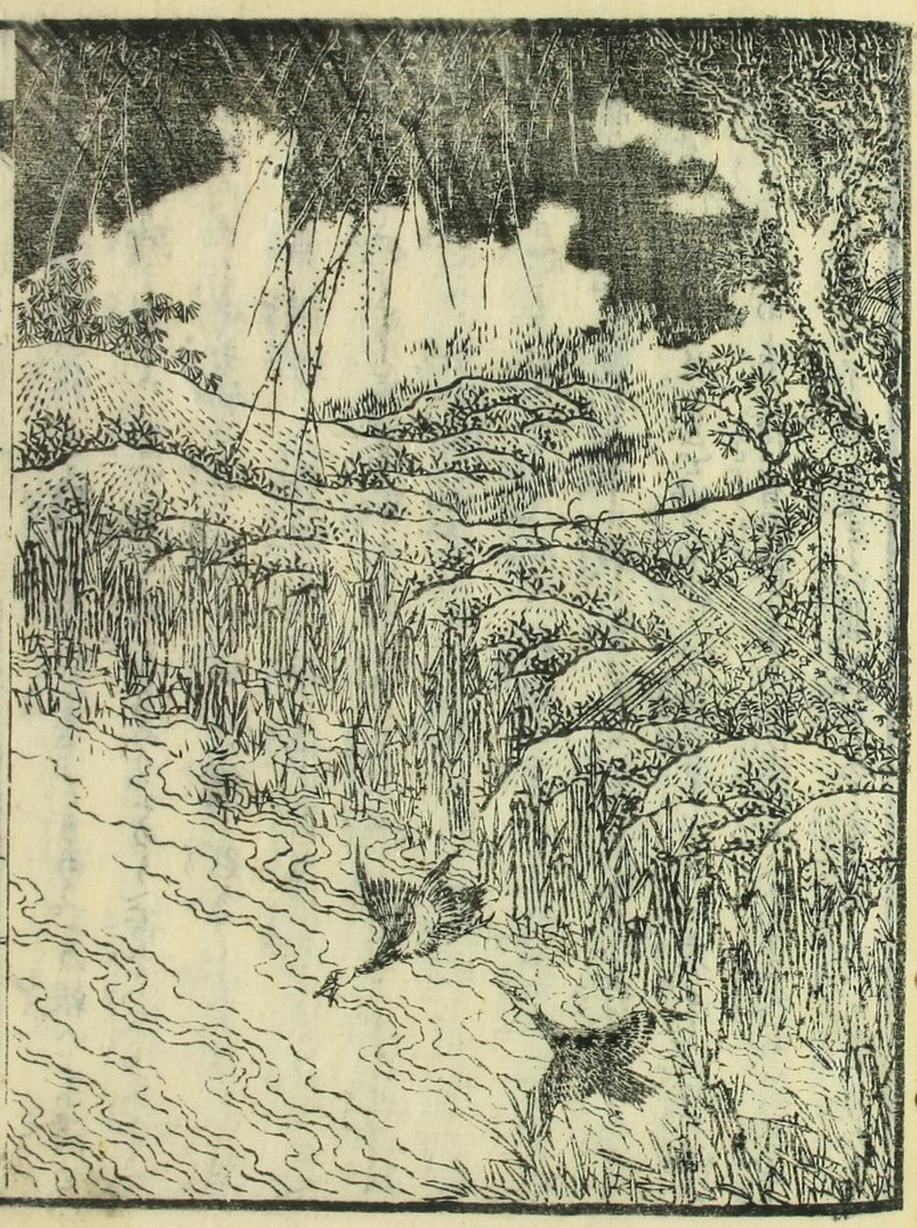
何者ゝまゞ妨るゝ。こ処離さゞやと抱留る。手と拂いんと力ゝ。究むるゝ女の纖弱さ。何卒離しこま。喃と。叫ぶ声さ人胴震へ人の心地のゝゝざるべ。當下件の抱留る。雄ふいやゝゝ声とあげ。駭きのゝる媛君よ。在下こそ三草太郎五昌之ふて。言さゞべこと屡ゞ。幷先緩ゝ言ゝあげん。奈何ゝまゞこの所へ。身と沉めんとゝ。ゝのゝ。死ハ一旦ふて易けまど。早ゝて後の悔ゝらんやとゝ。駭く。媛。こゝも手方ハ太郎五。思ひゝみゞ此処へ来て。吾倆と留る不側さと。依ゝてこゝ遠早く。揉奪まゝ心ゝ内ふ。こ向ゝて此方ハ意得ゝ。何等の條ゝ夢ふざふ。存せゝ。ハハゝ。まゞく此方と向ゝ。と手と放ゝて傍ふ蹲踞ゝ。抑在下さの所へ参ゝ。仔細ハ。陸奥磐城ふ争論ゝ。その挨拶の乃ふとゝ。朝夷三郎義秀也。鎌倉と発足ゝ。既ふまの傍と通らまゝ。舊友の情忘ゝ。石戸太田の

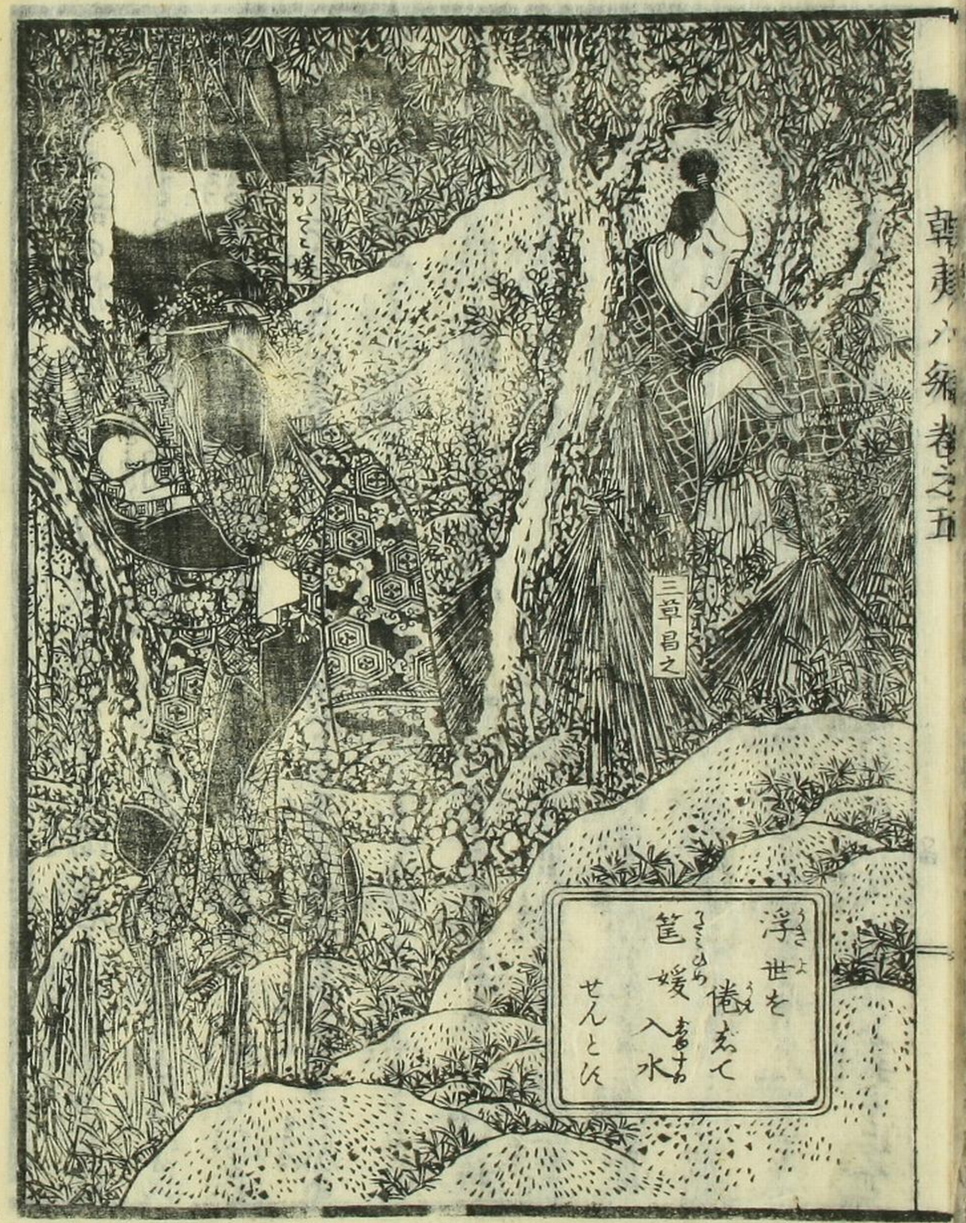
両荘と。訪ま欲とハ思せども。這回ハ君の命ふよりり。下まろうのまゝハ私ふ他と訊べき時ゑゝゝ。因て城戸武詮と。太田の荘へ遣さま。光仲ぬの安否と訪ま。在下と吉見ぬの起居と尋問せよとある。作ふりて両人ハ。昨日途あそこち別ま。既ふこの地へ入ーうど。案内ハゑゝぬ武蔵野の尾花が原ふ路ふゝ差ひゝゝまぬ方と呻吟て漸こ此処へ来ーうど。秋の日蔭のさりげゝく全く暮て東西の分ちもあゝゝ荒屋の。撈火の影と目的ゑて。石戸の荘と云ふゝ。この川副と瀏ま折ふ。稚児懐ま女あり。定めて富所の人ならん。彼ふ問んと近づまて。言葉とかゝんとゝるとゝ。南无阿弥陀佛と唱ゑる声ふ。媛のは声ふ。よゝゝ似ゝと存まどかゝゝゝ思ひもよらぬこの怪ま風情ゑ。問でもゑゝこの川へ身と沉めんと呻吟ゑ。何方の誰とハ知ゝねどもまゝゝゝ若き女子の身殊ふ抱ま稚児と。両個が命捨ふ来ゑ條こそあゝゝゝゝゝゝ。

女子ハ忠隘くて。妻夫喧嘩いさゝうの。ゑふ逼りて身と遁つハ。世間ふ類許ゑ。ゝゝ若然らんゑハ不便のゑ。といたゞ入ざる老婆心。まゞ一且ハ留めて遣んと。抱ま留ハ媛君と思ひもよゝゝぬ縛の釈愚時の身ゑつゝく解さば。死んと覚悟ゑゝまハ。で一朝のこゝゝゝ。その條奈何媛君よ頓く作せゝと。詞遽く問みらま。媛ハ悲ーさ面目ゑさふ指めうゝて竜とゝる。数行の涙ハさゝゑ。あゝまこの時やゝゝ顔と挙げ。眼と屡ときこの程の容子逸く物がゝり。任意良人ふ捨らまて。身と獄ーとハ我ゝゝ。先立ゑハ父ゑ灵ゑ恥とおゝ人ゝ生のひゑゝゝぬこの身とゝふ拐名と潔よゝ。せんゑのこ。猶主従の縁ま尽ゝ。今盤ふ逢てこのこと。言遺ま歓ーさ。若もこの後冥者ゑ称ふ廻りあゝ日のあゝゝゝらゝ。妻ゝく是と告て給べゝ。ゝゝゝ。朝夷ぬふ年永日ふ添ま恩義と稟ゝゝ。身の薄命ふ報ゝ。時節もあゝゝ仇ふ散る深山のゝゝゝゝ

ゐるを錦と飾る秋ぞかき。哀れこの身のゐる果て想像やとぞうゐ懐ふ
在る稚児の顔と顔とおもて。歎さゐ沉む理と実ゐりと想ひ彩りくるまこと
うゐ中こゐ。あゐぬゐゐ。世まゐ。爭う媛と死ぬぞさかる男ゐ安倉ゐ三元とれと
扶けよと宣ふゐんと祇と改め。その心歎さ且いまと心と捐て潔き名と遺
さんと思ゐて逸くその理顕然ゐて源廷尉の媛君と。誰ゐうこと称せざゐん。然
ゐ在下図らずゐ。こゐて見えまゐすこと。命と助るゐう。離れも報う時
ゐゐん。冠者の心奈何とゐ。知ゐざけまどゐ佐ゐ隠まのゐ小西郎ゐゐ深き巧
と推量り。弁と避んとゐてゐやまゐ。媛君と若君の心ゐ寄ゐ迫ゐ。重次
無體のゐうゐ起ゐ。さまざま渠ゐら在下ゐ。身ゐ把ての主の仇生ゐくべき狡者
ゐゐ。今宵かの家へ潜込て。慶ゐゐゐ。この昌之の腹ゐ医ぜ。媛君案内
ゐのゐれ。彩のこいそで例のまで。血気ゐ白ゐる烏滸と呼ゐのゐん然ゐゐ。先頃

冠者ゐ入部の折ゐ。宮小西郎弘義ゐ鎌倉ゐ来て潜ゐ居り。執権衙ゐ
屡ゐゐりゐゐ人ゐ。當下朝夷義秀大人ゐと。訴ゐ石戸の荘ゐ當時ゐ義
ゐ異ゐる所ゐ然ゐ吉見義邦ゐ。新ゐその主とゐうゐまゐ。假ゐゐゐ要用ゐゐ
とゐ。入部のゐと計らゐべきゐ然ゐゐ。ゐゐゐゐゐ密やゐ焉ゐあゐと不審ゐれ風ゐ
ゐく先達て。石戸の荘と須さん。屡ゐ執権ゐ賄賂ゐ。その條ゐくゐ上さゐゐゐ
さまざま這回義邦ゐ賜ひゐゐと遺憾ゐ。秋ゐ訴ゐゐべきゐゐゐゐん。彼執
権ゐ好悪ゐ。始終ゐゐゐゐゐゐ。義邦元来暴湯ゐ思ひもゐゐゐ陥穽ゐ
陥ゐゐゐのゐゐゐ。汝石戸ゐ性ゐゐゐ密ゐゐゐと冠者刀称ゐ告よと作せい
らひゐ。今ゐゐ思ひ當ゐゐゐ何ゐゐゐのゐゐゐ。去
来ゐ来媛君案内ゐ。頻ゐゐ促すその面と。媛ゐんやゐゐ然ゐゐゐん。然ゐゐ
ゐゐと思ゐゐ。ゐゐゐ信偽と定ゐゐ。妾ゐ今宵の一件ゐ実ゐ重次ゐ起ゐゐゐ。




ぬてこ媛
三草昌之
浮世を
倦て
笹媛入水
せんとす

渠が母なる斧木おいての程よりして種々の恵みを稟しともあれ。その報いだに得せずして一家を殪し殺さんハ罪いと深き所為なり。さるから人董次秋弘も命に及ぶの悪行あらぬぞ。吾儕に迫り及ぶとりん威ハ憎し然あらず。実に殺すの心にあらねバその罪ハ循軽からん。吾儕がこゝに命を殞すもの身に忍びざるの秋なるに。任意このまゝ死しなりとも渠を敵といふべからず。亦方ハ何と思ふぞと答て太郎五昌之ハ眼を怒らし牙を噬み甲斐なき児とを宣ふものかな斧木とやらんが日来の恵にも媛君とりそ折よくいかなる家の新婦になさんとすなる誠の心たのむべくぞや。董次が罪ハ万死に當まり。争ふ敵といはざるべき。恐さここにゆくと媛が宣ふハことの理に似て理あらんごとくて婦人の仁といふ魯なるまでも猛夫なるハ所に従ひあん後に万一義におらずと。符者刀称ますまま朝夷の大人になまま咎めあれバ。當下件の分解えていよく不義と定まるバ腹を劈くのこのみの沸立胸の遣方なし

左右なる間に夜や更なん。いざ頓と立あがる折から侍の藪蔭より顕れ出る七八人手ゝに棒と麻縄と三條持もあり。女子の足まへ移早く遠くハ往じさ脊戸廻り林竹薮稲塚すぞ推頒探して時刻伸び所詮今宵ハ画謗労。と思ひあるゝも若大爺。黄金の十箱も墮しなる眼逆ぞち身辛ねるた吾们まもも罵りさへ。先に立人の大騒動悔しとおりんど捨てもおかまいバこれ遂出と隊頒えそ。隱ま川辺の柳景定らむそままで遁するを媛がお後をこの疾く雑人媛ハ嗟やと身を遠巡農民们ハ族こと物ともいそぞ近づく所に三草太郎五さも塞り。尾総なりし農民们你が為の主君にも奇しき地割の内室を。逆へんとおろゝそしほ程の式あるべきと然ハおくて燈火もおく棒と縄送ハ誰人ゝ指揮せし。頓退らずハ逸とに首捻切て並べんと勇者の綱に雑人ハ何と回答もあらぬの土に汚と吾门ハ辞釈さるゝに辨へぞ。児を懐とらる若き女づれ

吟味あくべ引縛し。疾く連て来よ。労資は。何ぞうでも共へ。邑の歩吏が觸ふよう。這の避逅の銭設け。仕ぬは損と甲乙。催し集め燈火のあくは却て此方のこ目標あり。便るくくん。と態と炬火とも携へ。這は吾ども巧夫のこ此他何の思案もあくぬ下郎が罪は赦さまよ最初くく地元の内室と。知るものあくべ。争ふ。労資ふ心と掛ん。這は怪くくべくと。苔々まべ太郎五昌之推カ。ふくくは。你等その罪ふ。歩吏と成て觸させ。何方の誰ぞ疾くくと詰問まんそきこそは。宮刀称の若大爺。董次刀称ふ。ひとはて点ぬ。あくべ。我内室の此供し。董次が方ふ到るべ。頓先達て案内とせよ。とのたまへ。各立あがり。開はいと易きなるふこそ。是よりは路遠くくべ。此方へ来まりせと。先ふ立綱を伴ひ歩行ふぞ。三草は嫒と扶け曳き。仕と数町あくさるふ。此ふ早くも秋弘が。耳ふ咬えて。嫒隠是川ふ呻吟とも。自分ひとて伴いんと。奴僕が

一個両個とはそ。炬火より照さ一径路と喘そ走来。嫒とまオ八ん中るふ。董次秋弘とふ。太郎五昌之ふ。遅くて董次が前ふさち塞り。汝い宮董次ふ。我は性昔吉見冠者義邦の臣ふ。今は朝夷義秀ふ附属しる。三草太郎五昌之ふ。遅くて詮ふ。今さく汝嫒ふ無駄の悪業雅須とふ。ふ。ふくて進退谷まる。嫒は其の家と思べ。出命と捨んとしの所へ。折ふく命りて使けつ。嫒の此所ふ恵ふけとど。彩まを嫒と苦しまもう。脱ふ汝が所業ふ出る。我故主のくるふ。その怨と復さんと。汝が家ふ往んとすると。汝早くもて来て。出會さるは物怪の傷。乞こ我と勝負よ。このひも果ぬふ腰刀ずくとし抜てさち向へべ。董次秋弘ひも。悖とえるが今さくふ。道を隠まんやるふ。心理ふは十二分の怖まれも。詮方ふ。胸ふ定めて答ふ。冠者ふ捨らまを便術ふ身と欲くのが不

便さぬ。若り我が心に應し。すべこの孩児を守りまゐらせて。石戸の荘に安堵すべく往
来をも許さんと。好意を以て語らひしを雅頭なりとハ聞もあへず。姐
兼しまぬ條あるなる八夫それなるを家を抜出死なんとするハ媛が血迷ひに不
あそ我ハ一向思ふるものならぬを汝が片言を僻耳に聞きとて故主の為に怨みん
〻あれ狂人の狼藉なるぞ。この媛が疾よりの私夫に心得ありし。といふとも敢
あ昌之が身を遁れんとて左右といふとも誰か誠とせん汝が今の如く命を
悔して媛に背が心を捨に出んや畢竟己が非を飾り。他を愚にする
一言詞戦ひ無益なり。我抜放ちて紐鈸汝を戮して我死する両箇のみを
究めまだハ光の鞘へ収まりし。然らば口の根横裂に裂ねんとも電光の如く
ごとき及び擧一声かけて打込ハ今ハ猶豫もあるべしとそ董次も刀を合せ
失よ雲内がれし右に左に外し。虎乱青眼上段下段挑み戦ふ景勢せ

よぎる雑人等ハむしろ膽の心ハ消るばかりに怒り燃ぬる炬火に熱さを覚え
て抛りせし。ぐ枯葉ると逃散る星もなく月も火影さへ暴に曇るぞの暗
刃の光りとて目的にて東風西風大臣……太刀を受損じ。董次ハ肩先
五六寸ばかり斬られて腕弛み嗟と叫びて撞と伏とて音と道導に昌之ハ足踏
て微塵にまたふと打ち込む刀ハ肭中とむらりずんと放さまとありけて秋
弘ハ。そのまま以死でなりかかる折から雑人が驚き鈸り箇様にことの知らせに
人ども驚き折も修羅酷残ハかくとも昨日の謝禮且この首尾
を索らんと来りて。この閑室にて酒宴とまでハあらざれど在合せたる酒肴
に。いさぐ辞を催しけるが薄暮におよび筐媛何方注らんさんとて家内
の男女さち噪ぎ中にも董次秋弘ハ。雑人們と呼び集め。左せよ右せよ
と指揮して行方を探り索むるに。眉毛の火と拂ふがごとく。と喧しく

ゆくる程ふ。這い怪くもぞ然いあるとぞ。内の間ふ住方い知まん。と猶疑み
えるふこの注進。開い何奴ぞ一大ふと。小四郎弘義ちちあぐ刀あの把り縋
出んとするとき。斧木い雲ゆと狂め。雑人們も周章惑ひて。そのいふ所い知ら
ぬれど。媛ぐ由縁の人くて。然も拒むい中ふ。ふ芸へえる況奴ふ忍ぶ。平
示ふするあるべ。不憶過あるん人数多おて。往ゆ人そと甲ゆ未とゆ未とふ。小
四郎刀称い心こそ。猛くい在せ老年ゆ。你達傍ふ屡。副て。過ゆ況ゆ
らんよ。と狂乱の如く立まいる。ことと見ふける。酷残も己弓矢を執る此ふあ
ねど。義と人ぞ為ざるい勇ゆ。倶ふ往んと締ぢに弟ふ狭め。一刀ゆ。そも貸
ゆんと傍ゆ。刀一腰借うけ。人とび長押ふけ。ゆる薙刀こを屈竟のものそ
あまと。外ーてそまと。引抱ゆ。是ぐふあまび僻者の。首薙落さて。百田の崑
崙瓜と伐ゆ易ーと誇りゆふ。勇ゆ立ゆ義勢ふ曳ま。農民們も嘈こと。

詈り立て。引副ゆ。弘義いくい。董次ぐ刃のゆ人。乳遣ーゆふ胸のゆん。躍り
くそども。足い猶。ひゆ所と諸ぐくい息切ま。心昏迷ー故ゆ。ゆぬゆふ弱ゆる。
乳と励ゆて十町ふ。隠ま川ゆふ近づけ。と如法暗夜の闇の方ぞ。と人ある
方ゆ人えゆゆ。雲時汐湛そのゆふ。ゆゆ合ふ刃の音ゆえ嗟と叫びて
倒て。ゆゆ。ゆ児の声と。弘義いあるふ。ゆ炬火と自刃持ん地せゆ
ゆんゆふ。会懸ゆるゆる秋弘い。肩先朋中斫放ゆま。殷ふ深ゆる景勢ふ。右ゆ
ま。い向ひふ衝ゆる。壮士い已ぐ子の敵ゆ。処動くゆと。詰修て。宮小四郎弘義
ぞ。恨ゆこの刃ゆく。清よといひて。引抜く。氷の刃。意沈ゆりと。三草昌之血ゆ振て
ゆちむ。年ゆゆ老ま。弘義も。脆ふ。ゆ人えのあるものゆ。ゆ得昌之猛ゆ。
左右ゆくい。下風ふ立ぐ。後ふ引副ふ。修道院僮ふ。敬い一個の青春何条ゆのあ
べきぞ。者共砂と。搔掴。眼潰ーふゆち。挂よと。指揮ゆ。ゆ薙刀の。鞘て。外ゆ。

揪の淀の川流の水車鳴戸の潮八丈ふまうとのふる黒汐の渦巻ども薄と廻えてかると昌之ハ佶と白眼汝ハ誰ぞ宮ゲ无道と佐くる狡者世ふ二ツと法師首ともふ把まて後悔すると飛鳥の翔り陽炎稲妻ゑ祭頭ハ彼処ふ隠ま爭ふとや半晌可當下宮弘義ハ渾死ふ数箇所の疵と負て心神疲れ撞と坐し刀と杖ふ息次居る酷残ハ程後まもやらぬ薙刀左右ふ晃う。濯りかる狐昌之ハ一上一下ふ請流し刀逆手ふ薙刀の湾形毅矢とうち返せば。酷残堪へぬ薙刀と反落さまて心悸き拾ん さて俯く所と昌之透さず手とさし伸べ右の腕と丁と斫る切らまて酷残猶脇まず拾ふ長刀晃う足と攘へ赤騰り上うう撲ば死と平め諸ふ空と拂へせて思ハぬ反る朋腹と両段ふるまと切蕊む太刀得最初の右手の瘢疼むのとうん滴る血ふ不ふ粘まて肘の自在と効ず。

請損ぜ肚と切放ときて倒ふ卻舎逆る血ハ巖角ふせうまて落る滝のと大腸小腸痲口ふ流ま出て仰反て物ともいさぶ死ぐりゐり。夫殆殘が死ふ為る。自業自得とものべ役小角が流まと汲と有髪ふ僧行と保つと以て優婆塞とひ孔雀明王の經と誦し。國家の為ふ太平と祈念ふすべき職ふ在り。かの雲ふ乗り空と翔る外乃の法と以て宮弘義が賄賂ふ黄金ふ惑ひて邪乃ふ與し。幻術とて人ふ眼ふ人と火坑ふ墮さんとす。その罪忽地身ふ報い双の猜とありぬること実ふ皇天ハ邪悪と罰そ。その例の人ふ猶然り。見ると以て聞する人の勧懲と為ふ。千茲斧木ハ弘義ゑ。人ふ子ふる董次も敢て音信ふけるとぶ今ハかしく按ど苦し門きふ出つ右祝左祝まど一向容子の如まさるとぶ一人遺りて千万の物思ひとりてあらんとう。その場ふやきて音信と。

笑ふ如ドと沉吟す。厨温ふ居さる炊女と一人遺まる小奴とと。俱ーまて蹤へ
ち。畦路伝ひと一散ふ遥の火氣と目的ーー走りて主処へ近づけば嗟去
慙やふ弘義い刀と杖ふ俯て息の有会さ人分さぬふ董次い行ったっさーまと
けん。般ふ深ッ倒まさるまと修道院跡残も作反死ーてありくふぞ這へ逆
い如何ふまぞりふ。まづ弘義ガ傷ふ係ーて人まび聊息ある容子耳のまてふ
口と係せ。斧木ふ伝り小四郎刀称心定ふ持ふ人女でとてあまと良人とみと殺
さまさりー當の敵芝媛とも諸共ふ討て怨ーと報うべーー怨ーとも彼奴ちい伝方
へ隠まと忍びん。出よくと大声ふ呼ふる声と笑つけて三草目白之忽然へ飛へ
ま出て汝ーと。弘義ガ渾家斧木よるうまと係達ふ一面の交りるけまび恩
もふ。恨こあーねど故主冠者刀称夫婦と種々ふ陰まーと笑捨ふ。ぬ無業
その人の乃ふ恨ーと復すのこ。ちや是まぞあて腹い医ぬ死骸い汝ふ呉て生ち。

追善供養い勝手ふるせ。と笑て斧木い小四郎ガ。突さる刀と扱さりて。
汝ガ為ふ良人弘義子の秋弘まを殺さまさる。追善供養い汝のそと。
芝媛との首刎て供ふる他いあるべ。覚悟るせよと怒りの面色血刀
振てさち射ふ三草い呵ーちち。笑ひ罪ありて父ふの奴答誅せーまさる事
仇と。報りんとい僻ふるり。汝女ふあーざまび。俱ふ三途の乃連と做さんい易
さこるべーー長益の殺生刀の猟まと。助る命と捐ふ来る火氣と墓ふ夏
の虫。愚ふる所為せんよりも。疾と帰ふ亡者の後世ふ弥陀観音と憑むガ猶
ぞ。と朝らまて狂急さら。斧木いさーふ面苔もふく。繊弱女子も疑さる一念
乱まり髪の逆ふて裾ふを返さて夜半の風炬火の光りも絶とる小暗た
方ふ立さり。媛とうるよりとの辟の紀りい媛ぞまび渠とらひさる御こと近
寄る斧木と昌之把て引居ると。溜り抜ーちち揮る刃ーち穰ちんとまる

卻舍肩先破羅離と切裂き嗟と叫びて倒るゝ斧木三草ハ又やりて這奴
とゞ扶けて遣んとゝひしもその此の罪のその此と責双ふかゝゞ不便なる。然
まハ妻敕の苦こゝさせんよりハ一撃ふと刀振あげ立かゝると嬢ハ要はとあー
狂め。痛屁の傍へ近よるとゝ苦ーさ息とゝと吻て。痛屁ハ首とうち撥げ。
物いひしげる景勢なり

續輯第二十

初て非と悟る懺悔物語
好計再三到る程谷の驛

當下嬢ハ斧木ゞ傍ふ到りてやゝゝ声どあげ。痛屁ハ心と定うふ持さ一
言いふとあり。吾們おの因縁ゝ〳〵何まの地ふも安堵せば。這般ハ究めて安
〳〵んと思ふ間もなく冠者刀称ゞ身と隠さまとふより。仔細許の物ゝ心地
死ぬべく歎くとゝり。董次ゞ彩ゝ聞く耳さ右流左けまとも辱めるゞ後の崇

の護此影ふ然もなく會釈その座とゞ涙しるゝもまさ思ふ所徐浪世ハ
憑こゞふるゝ此ハ死すふ倍とゝ。と胸と定めて黄昏ふ迷ひ出ッ呻吟て既
ふ死るんとゝる時。とまとゝる太郎五昌之ふ端ゝく逢て互の作天さゝ云云と係
故と。語まゞ渠ハ怒ふ怒ふ怒ゞ。あん牙ゞ親子と怨まんと早ゝハ理さりるゝ。
ゝ人来り〳〵渋めより。心理いらぎ彩〳〵ぞ。あん牙ゞ篤さゝ抱ふ孩児さゝ安ゝ産
落〳〵るその惠こ今さ〳〵忘ゝ〳〵さるゝゞこの牙ふ恙ゝ。とりて怨こと復さゞ
とのまふふこの地と退てまゝ後ふ詮方あ〳〵んと留むる端ふこの此ゞ探ま
雑人ゞ手絶ふせんとする故ふ昌之怒りて渠ゞと懲〳〵。あん牙ゞ家ふ死
向いん。〳〵る所へ近来る董次折とゝ善けまとゝり合刺薄る涙ようまる
来る弘義及二人の修験。とゝも敢ゝく死ゝる心地ゝまいゝゝ。ふ罪業ゞ猶
倍〳〵と半ハ悔むその折ふあん此ゞ来るゝ人ゝ〳〵ゞ渠いらふも助けよと呉と

いて在りしほど迫めるに今さらに跡へ返らぬとの深痛然もあるにて家と匿し殺を非道と恨ともせん。堪忍せよとらんさえも涙に咽る喘涸声斧木に絶と掉あげて。およそ生とし活るの。死と惜とぎるりのやうある。況て一家と織に

るるに むけき恨こめて。九世に換るとも。仇とるべき若みまど畢竟父子利に惑ひ義と忘まる天罰とん。今盤に思ひ當りて。常言にも

いふ如く人と呪詛が穴二つと。喻へに洩ぬ吾們が。巧この納の組語。鼻に及び

ぬるこの災難。爭う人とむむべき。喃嬢う人よ。汝も人石戸の荘に縁て。良

人が望こと。徳とる土地然ると這回吉見刀称に賜りてと。空しく選

まと如にのるに計らひと夜と日に嗣て北條刀称のに。彼へ従てそのるとと。

怨こと。りに荘園に執権ぶるも。任せば這回吉見に賜いまど。彼人に

故範頼の嫡子とては連枝あり。後と害ふる條あまど。汝若内の使嗾と

して。彼人とぶに失るに。石戸の荘と賜いんと。仔細に密に宣ふ

弘義に一日も早く計らんと思へど更に便術に。竹塚なる修道院に昔に

怨ある。渠に絡らひ呪詛せんと。牧多の黄金と賄賂て。憑めば異議なく諾ひ

て。冠者に住める床下に秘匿と埋めて。潜伏と。做さんとまるに。流れ矢に

因て熊虎の魔神と。猛り。隱と川に失るんと。術て甲斐に當下ろう冠

いその身と隱さる。然まで。その程男子あり。是も俱に計らんとする物ぐるの秋

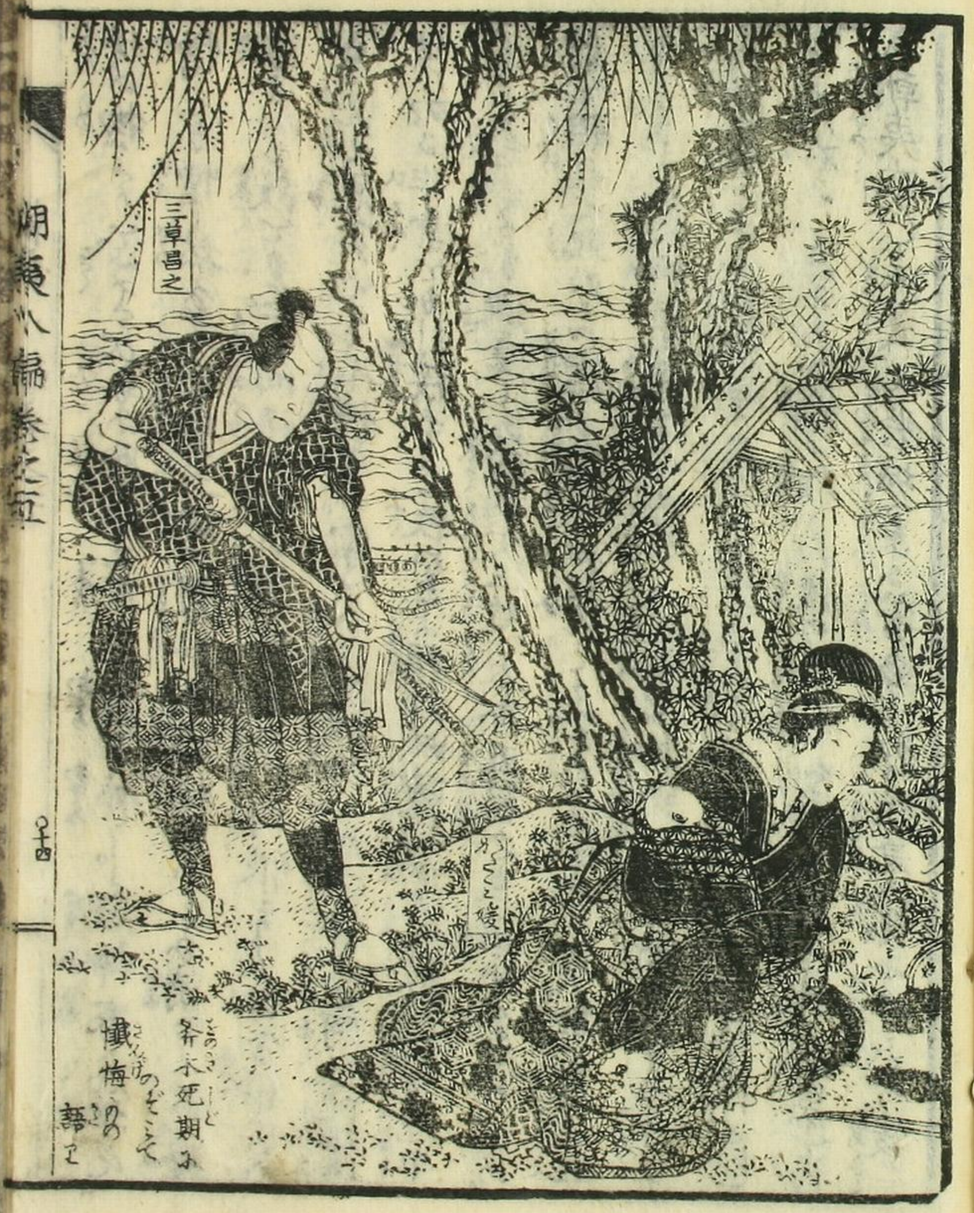
弘嬢に。慕の情態深く。倘孩児に失るに。嬢に欲きに身こと。捨め。

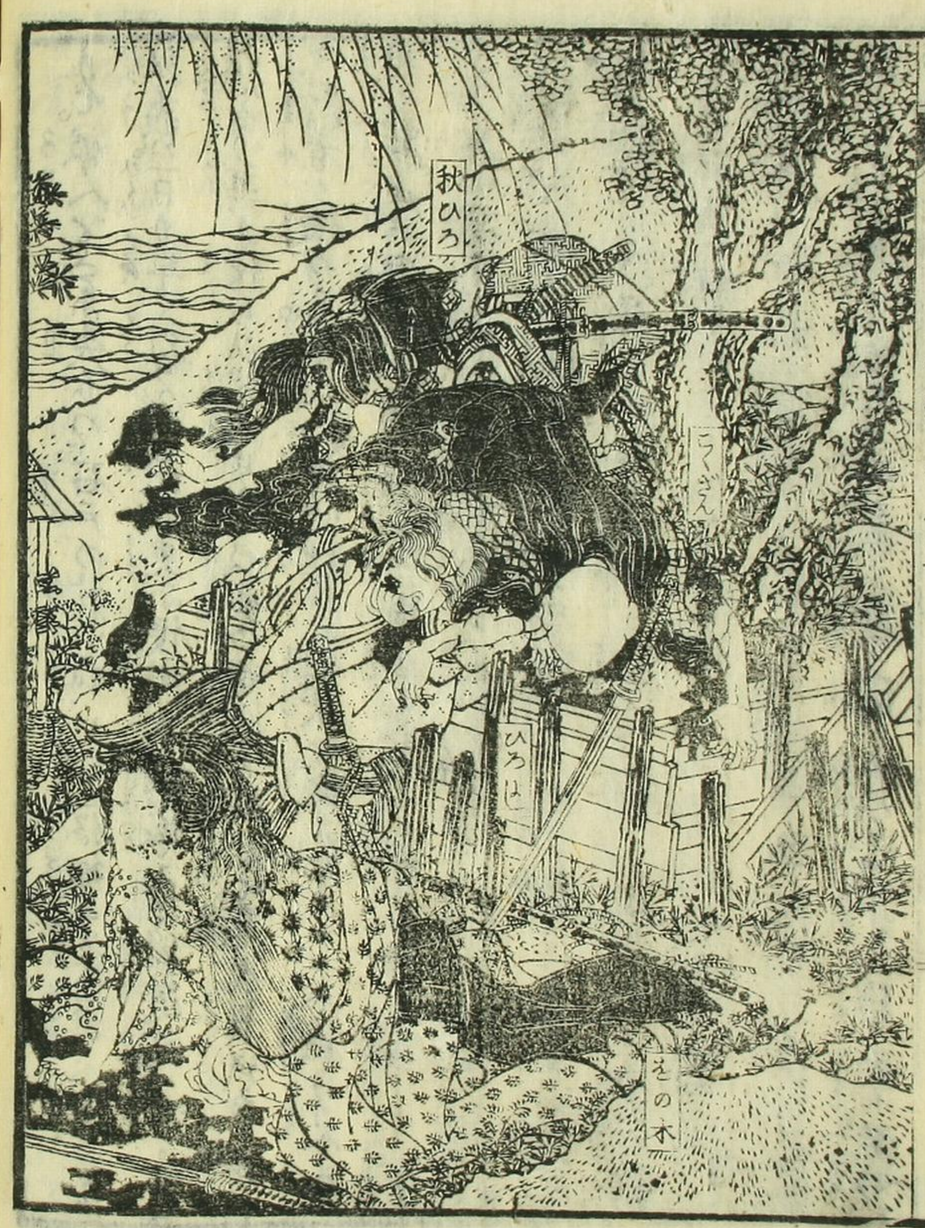
嬢が羈にこの孩児と。世に人に逸早く。嬢に心と解こと。ようまで。こるの。我們が計

らひと。董次に嬢と。挑ませも。一に渠が頼ひと。怪へに件の荘園と。奪んとする

計略の差ひてかる景勢に。他に来まる災害に。自業自得の今盤の苦

難に。主てこの人と。逆る。血に。ともと俱に。吻く息も。次に弱る。断末魔嬢に


三草昌之
斧木死期ふ
懺悔のごとく
語る


秋ひろ
ひろは
えの木

件の物がくりとせさせび毎ふ胸潰るとき或ひの後さ怖ゝと心神寒く心地に
憎さも憎し然るに四重五逆の罪科も懺悔ゆへこゝろ消ると咲く谷
木もかゝる故とりて不問語の身の悪さ。この後一向恨まずとの合掌ふ
るくんと思へばいとゞ不便さふ掌を合せ伏拝ゝ西方浄土の阿弥陀佛
世にかゝる非業とも引接ありて救ひ給へ願以此功徳普及於一切自他平
等と念ずるも涙ゆゝの面向文三草太郎五昌之も俱ふこちよの所の
罪を倍礼て死ぬゝい潔く人の形ふ死んとまた。そのゝ上ようゝ聖の格言畳
るるゝと血刀拭ひて鞘ふ収め。今この女子ゝ物語。北條刀称ゝ新まを不移る
所以い分ゝ冠者ゆゝ疾ゝうそのことを察しゆひてこの序ふ恥ぢて隠りの
るゝん右ゝ左ふもの地ふ在さび後の災害知べゝ。在下既ふ當所と詩
ひ朝夷大人と逐ふ。碧城へ来る告るゝ。ゝる危急の場ふ係ゝ。ゝ媛君

の位安居とゝ手ゝと彼処往まんや。城戸四郎武詮いに使ゝて太田へ参りぬ。
さまび今ゝより供る。大田へ往て光仲ぬも。在さび俱ふ商紙。この後のこと計ら
いんに心奈何と篭媛問まてそまふ仔細ふまじ。ゝる馬飼標吉ゝ。朝夷大人ふ
告ゝこゝ。この地と死行ゝゝかの大人。ゝゝ陸奥へ首途の所なゝと失ゝ人保り
来て憶ひもよらぬこの大変吾倩の往方ゝまび途方ふ迷ゝんこのこの奈何
ふせゝゝ仕ゝふ。昌之右左の田楽ふ著ん手と拱ゝその折ゝ端ゝて来る
ものゝ。誰ゝとゝまび嗣忠ゝ。截ぶ西個ゝ係ふ蹲踞ゝ。昨夜漸ゝ亥の刻
頃孫舎人到ゝ著ゝ。和田殿へ参りゝふ。朝夷大人ゝ如此ゝ。昨日この地と
敷足ゝ。碧城へ下りゝひとゝ失ゝ。ゝ失ひ。先ゝまゝ嫂君ふ告ゝて猝と計
らんゝ今朝ゝ彼処ゝ出ゝ。心急ゝて樹の根ふ躓ゝ凡と蹴ゝて夜ふ話
ゝ心の外ふ道間ゝ。帰ゝて人居ゝ庵温ふ跪む牧女ふ人ゝの家ハ

如此くまで殺さまで失の。何ぞ妾も内室の。佐と彼処へ来て。いと怖しき武夫の。彰はしき歩て内室も切らまの。とてくるるよりも。乳も魂も身ぞ副ぞ。逃帰りて伝ることのこと。その訳詳ぞ知りがく。迷ぞくまりし。と。その類末と語りて。然ぞもその折よく。三草姓の来まて。媛君のこゝ恵ぞ。あるこの。何のゆゑ是ぞ如んと。歓ぶこと方なく。三草も程よく舎粥ぞ。然らば今も言る如く。大田の荘へ赴くと一決して主従三個。とて玉。終夜大田と行て歩りり。安平其生再説陸奥る。朝夷三郎義秀へ。脱ぞ猛八ぞ異見ぞ。越中へ帰ること止め。一先絃金之飯らんと。城の民們とこゝより還し。痛負擒と護送して。白澤紙より引飯し。本街たる。みけまど。道程遥ぞ隔りけまば。逐ひ蒐来ぬる者もなく。平こと。武義と絃。程谷の澤舎ぞ著ば。彼処ぞ捨ての幕うち迴らし。兵の多少ぞ知るまと。軍勢屯ぞ。さりしば。朝夷ぞ。いとまと。這ぞ知るの。来ぞ。まつ且くこゝぞ居て。その容子と。ぞんと。ぞひ一旅店ぞ甜ひて。宿の主ぞ問るぞ。何でるう定るぞ。存ぜ。ぞ昨日の薄暮。遽ぞ移のでくるまの。所の人民。後を忘ひ。或ひ老る親と曳き。搦き者の手と。捧乃えて。資糧雑具ぞ運ひも敢ぞ。今ぞも軍の始まるぞ。逃迷ひ。強擄るす。かの陳の統領る。葛西兵衛清重ぞの使らて五六個。その強擄と制ぞ。送陸奥へ将軍家の。使として遣ぞさまとる武夫の。彼地ぞ。旅ん叛逆ぞ。眼代地頭と殺害る。後会へ攻登ると。注進伝らるねども。用心ぞ若くとまらじと。主人る。葛西清重中條左ぞ門苅田豆次。その他の武士ぞ。今ぞ。せられ。とぞ出張て不虞と防ぐ。必敗のおるもまるねば。後るぞ噪ぐとるれと。示ぞのぞ人とい。漸く安堵の思ひとる。平生のぐぞ五吾們も活ぞ。とぞと義秀と。

尾に尾を著て注進し。我と叛逆謀叛の徒となりしこそ安からね。然らば是より葛西の陣へ往向ひて綽の釈を逐一に披き通るに若ねど。准後をなす。獣六郎と猛八が倶に往んとなせしが。我一個にて綽足ぬべし。多勢は却て宜からじと制して頓て立出つ。葛西の陣に到りしが。清重自ら出迎ひ。寒暖の禮を述。かくて清重いふやう。足下先に陸奥の撿断使として赴れしが。いかなる趣意か磐城時直阿武隈太夫その余の諸士と。斬害するのみならず。農民救災し集會旗を推立て傍若无人の挙動は。こゝ逆心に疑ひなしと。膽沢苅原その他の知縣が早打の。密書の赴を斉一同にこの地へ我をぞ。さし向られて拒がしむ。然ればさせる人数も率ずて帰參の条は神妙なれども。いかなる故ありて。騒擾に及ぶや。その仔細をあらん弁は後会に入りて後宜しく言上あるべきなれど。在下等は爰に在りて。足下を止め時宜によりて防禦の一戦

做さんとするまで。除の事には與らず。擬て今より鎌倉へ。足下が後来の巨と訟へ。此処を通路は何下知に任さん。旅店に在てその沙汰を竢るべしとありけるに。朝夷謹て領掌し。時直以下を斬害せしは。深き仔細のあることなれど。詮なくては叛逆ると。讒せられんも朽惜く。その徒を生捕なりて。是等のよし逐一に注進あるにて。遽にて旅店に皈り。如此との事を猛八獣六にも語り時を竢に翌日に到りて葛西の陣より。使節として武士来り。義秀に對面なして。昨日足下が訴る赴き。頓に言上に及ぶの所。廣元善信以下の老臣同注所に會合あり。衆評穿議せらるゝに。尚義秀に異心あらずば。何等の事ありとも。先鎌倉へ訟へて。公裁を俟ぐべきに。時直遠臣なりといへども。これ将軍家の股肱なるに。討果を各にその意をなすぞ。加之その坐に在あへる諸士を害し剰へ彼処を退く時に。およびて農民を集會隊伍を做して。その容軍陣の趣なる

まこと心ふ叛逆あるべしと。その形ふ彰はまで。罪ハ免さ難くこん。因てその咎て後
舎人ての赦さまず。但し証拠の為拘ぜらるる者て生捕ぜ上。その名を糺
さば緯の旗意。まこと叛逆の有ることも知らまん。因てその擒ぞと。葛西の陳ふ受
把て後舎人送るべし。夫より執権の鈴ふ於て。擒ぞと鞫問しつゝ。磐城時重
なるが。害せゝるべき罪て犯し。且義秀一点ぞなるも。非分あ上ゝらんの。分ぬ
ゝべ當下ふ後舎人召るべし。此より宜く執達べゝと。下知ゆてゆるる。素と件
の虜擒なと。在下ふ遍よりめ。その准備ふて雑人なとも。召俱してぞと主人
葛西清重が口諚とりて演ふ。朝夷次て思ふ。この生捕なる時亜ふ。
従来阿黨せるのるまゝ右の如くふの後人執権の鈴ふて。この後のことひ
舎むるゝ然ふあゝずの令て取り。証拠とるべきを減じ。我て後て重罪ふ墜
さんまゝ軟汁るべし。好智ふ閑し執権が巧るの罠ふ罹らんや。と心裡ふ冷

笑ひ。あまふ答てのるるゝ。れ諚の旗を執達あり。具ふ兼諾仕つる。然るゝ
かの擒なるへゝる時直ふ共せし族其坐ふあゝて在下て。害せんとせし者あて
あるまゝ。渠なるのゝを召るせゝれ。鞫問あゝべ已て是ゝ。在下ふ非と
るふべし。然るをゝの執権の評定悉皆画餅るゝん。頗くん在下て渠
なると俱ふ召るせゝまゝ。對変るゝべ當下の理非逸く分明るゝ。然るに
ふ於ての在下が汚名の時までの雪ぎがゝく。紀問ふまゝ労煩るゝ。
故とりて擒のゝ。進らさんるのゝ不便あり。この議宜しく言上あり て再び
れ左右て族ち。奉るとるんまゝしけり。使者とまて兼り。然あゝべその
ゝ清重に。伺ふべしゝて。ゝち帰るゝ。その明の日ふ至りまゝ。二人の使者来
て。昨日返答の赴きて。那刻言上せし処。その義理あるふ似ゝまゝど。既ふ逆
意の巳不情あまゝべ。その許て嫌舎人入ゝて。因て擒のゝて召し。

豊六郎
まう八
いけぞり

うひと
やさい屋
葛西の使者
陸奥の擒を
遍与さくーと
談ぞ

理非明白ふ糺さまんと作せる処なれども拒むその理つゆく云ひ分なき思ふ不
言許ハ比ひなき猛者なるゆへ人命知まり。殊ふ渠ぞるハ擒の。必とあるて
其許と鬼神のごく怖惶る故、まことに對決あさび。渠ぞるが理とも威厳とり。
非とひ枉る較計あるゝんこの議決て赦さまび。さまびのよく擒の。渡さ下
とあるゝその逆元既ふ十指のあびさん処ふ差ぬ。因て理非の糺
断ふ及ぶに軍勢とさ出て。其許と縁さゝ。ぬよ一点も逆心なくば。渠ふ任
元擒と遍与。後の日沙汰と俟べし。この返答よく必届け。時刻と徒さび
復命せよと厳なる命あり。さまび擒と速ふ遍与さるる夫ゆとも。遍与さる
の日返答兼ねること詰りけり。義秀必て諸老ども評議の結構奇き
る。威厳と以て非と理ふ枉げ。人と評る市井る。俗ともとを恥とせり。在下
苟も和田義盛が三男ゆて敢るゝれど柳営の近臣ふ擇まれさる一個の壮夫

任意命と徴るゝ。この罪科とび犯ぬとも。必と追まんと罪なる人と隠ゝ
ぶでなる。黒き心の義秀なるゝず。老ども多が見差ふのろかるる沙汰ふ及ぶ
義盛と始め一族多が。堅謹ゆ。因て在下推参る。まし披んと存ずれ
ども。強て致さび右命ふ背るるの忍まもん。還て不忠の名とさゝん。然ぞび徴
ども愚存ふ。應ぜざまどの右命の重きと惶ゝ擒ども。清重ぬふ遍
与さべ。然れども擒る。万一命絶る不至まび。必ず明らむ道と失ふ
故ふ旅中ゆく如ぬん。恙るらんと要に。和殿多ぞるまと意ふ。朝夕
手充と做しのへ若今日ぞ死るる擒多る明日不慮のことあらば。侯者の所
為ありと思へんこの誅と克く執達あまと。葛西ふ使者。その
ゆ意ふ。頃清重ふ作へてりと受把ふ来ぬ。その准仮とるがとぞ。
急ぎ陳所へ帰りゆく。その後影と入送りて。猛八ハ進ぞ出。大人も侯者の悪巧と。

粗暴なる一容子然るに邪とも権とを。倣さんとする故一がさくて彼生捕を送りの人を詮術なるに仍て。遍く世方の理を却て非分なる人倣さと罪なれば身に需衣と著るるんと必定なり。飛令生捕と遍なさぬ故に。逆意あるとて軍勢と向らまさんば我とも及ばざるべく扮骨えて。恢ハぬ[illegible]一命とを。なるに拘るのと何条なるとあらん。理とうて非分に陥さるべ[illegible]と安閑とて不捷後に至りて一命と。失ふたるの雅あると。今軍兵を引[illegible]うけて。切死すると就て勝まるべう遍なさんと約束するとの。変改せんハいと易う克く思維の人と。義秀の所ゝ成り。勇名面に彰はまたいと憑くを。[illegible]朝夷いまて拱き黙りて義秀と感ずるの。畢竟この段綜長くして。この編を説[illegible]鳴さば。第九編に精く解べし。看官宜く發兌の日を俟閲ありんことを希ふ。

朝夷巡島記全傳第八編巻之五終

朝夷巡嶋記

同	第七編	松亭金水編次 葛飾為齋画	全五冊
同	第八編	仝 仝	仝五冊
同	第九編	仝 仝	全五冊

従初編 曲亭馬琴編述
至六編 一柳齋豊廣画 全卅冊

義秀陸奥の擒を牽て鎌倉に入らんとする代程谷に柳留せる数回の問答是非をくもかの擒を逐ふに及び執権の奸計義秀と陷いまんと巧めるを剛若の猛人智術を以てその證を立はるる千変万量の新奇妙算和田合戦の兆を含むその顚末もこの編に詳に解て看る飽ぎ稍に佳境に入るものなり

編述　東都　松亭金水稿本

出像　仝　葛飾爲齋畫

淨書　仝　梅亭金鵞

剞劂　京都　樋口與兵衛

全傳　鉢被　復讐初瀨物語　栗枝亭鬼卵著　葛飾北明画　全六冊

信濃筑摩川のほとり厨九平とゝ云農人が女怪亂に呑まれ妖怪厨广郷太郎が出産河内国交野の乞士山と云が女初瀨姫鉢被ぎの母継母水老が変悪の母拐洋国大江の張が横死を子孫父の仇を尋て國々に初瀨再会の奇偶ゝ父の仇る妖怪を滅ぼす初瀨親子の昇天紀

安政五年戊午春正月吉日發行

刊行　大坂心齋橋筋唐物町　河内屋太助　合梓

書肆　同　北久寶寺町　河内屋源七郎

明治廿年　月　寛入

拙舗累年書籍ヲ鬻キ近來都鄙一般書房ト弘通ス且ツ諸府縣廳或ハ諸先生ノ御藏版アル毎ニ幾兌ヲ命セラル故ニ新板圖書ハ積テ以テ洩スコトナシ加フルニ和漢洋ノ書冊ハ今古ヲ不論亦以テ備ヘ置ケリ仰冀ハ書ヲ購フノ君子其多寡ニ嫌ナク弊店ニ就テ御買得アランコヲ

文榮閣主人謹白

製本處

前川源七郎

大坂府下心齋橋筋北久寶寺町北九番地

早稲田大学図書館
011888007557